

令和 2 年度

事業所名 : グループホーム「綾の里」

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370300311		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム「綾の里」		
所在地	〒022-0211岩手県大船渡市三陸町綾里字清水125-2		
自己評価作成日	令和2年10月13日	評価結果市町村受理日	令和2年12月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

周囲を自然に囲まれていて、ホームの近くまで動物が来る事があり、目の前には三陸鉄道が通っている。畑で野菜なども育てており、それを収穫し、食事に提供している。また、草取りや花植え、毎日の環境整備など入居者が積極的に行っている。
 デイサービス、小規模と併設している為、避難訓練など合同で開催しており、地元の分遣所の方々にも参加していただき、助言をもらっている。行事には近隣の方々や地元の小学生が参加したり、小・中学校の行事に毎年招待していただいている。こども園の子供たちが訪問してくれたり、地元の伝統行事も時節には来所され、地域との交流や、ドライブ、外食、ホーム内行事にも力を入れている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、新たに造成された住宅地に隣接した海に見える小高い場所に立地し、すぐ側を三陸鉄道が走っている。また、建物は小規模多機能ホーム、デイサービスと繋がっており、事業所相互の協力関係が築かれている。運営推進会議の委員は、地域の各方面の方々で構成され、様々な情報の提供や助言、支援をいただき、事業所のサービス向上に役立っている。また、広報の配布や利用者の散歩、イベントの開催等を通じて馴染みが増し、地域にとっても欠かせない施設となっている。コロナ禍のために特に外出機会が大きく減少しているものの、少しずつバスハイクの再開を試みるなどして、利用者の思いに寄り添う介護を実践している。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和2年11月6日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が ○ 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が ○ 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	リビングや事務所内の見える位置に理念を掲示しており、理念を元に年間目標を立てている。	震災後に高台に移転新築した際に、職員で話し合い3項目の新しい理念を作成した。職員間で共有できるよう分かりやすい内容となっており、事務室のほかリビングにも掲示し、職員は「笑顔」で、「本人のペース」に合わせ、「優しいケア」の実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	例年だと地域の小学校・中学校の行事に参加したり、ホーム開催の行事等に地域住民の方々が参加したりしているが、今年度は思うような交流ができていない。毎年、地区の清掃活動に職員交代で参加している。	地域との交流を大切にしており、町内会の清掃活動には職員が参加し、事業所の広報を周辺の20世帯ほどに配布している。コロナ禍で今年は休止したが、ホームで開催する夕涼み会にも多くの住民が参加し、地元の小中学校の運動会の見学に出かけている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホーム便りを近隣の方々や小学校、駐在所などに配布している。また近隣を散歩した際には、近所の方と挨拶をしたり談笑したりとコミュニケーションを図っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に1回開催している。利用者家族・民生委員、分遣所や駐在所、小学校の校長先生などに参加していただき、会議を通じて地域の意見交換や報告など行っている。	複数の民生委員や町内会長、公民館長、駐在所長など、運営推進会議は多くの地域関係者で構成されている。コロナ禍のため5月は書面開催としたが、7月から再開し多くの地域情報が提供され活発な話し合いが行われている。避難訓練と併催するなどの工夫をしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市で行われている地域ケア会議や助け合い協議会に参加している。小規模と連携を図り、どちらかが参加できない時は参加した職員が伝達をするようにしている。また事業所で行われる運営推進会議に参加して頂き、制度面での助言を頂いている。	運営推進会議に毎回市の課長が出席し、事業所の状況を把握してもらっており、日常的にも電話やメールのやり取りで連携を図っている。市主催の地域ケア会議には毎回参加しており、行政のほか、関連事業所等との交流も重ねている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現時点で実質的な身体拘束をしている利用者はいない。小規模と合同で身体拘束適正化委員会を開催し、職員による部署内研修会を実施している。夜間は防犯の為玄関は施錠している。リスクのある方に対しては併設している小規模、デイにも協力してもらっている。	身体拘束廃止の指針は法人として作成済みであり、事業所では2カ月毎に適正化委員会を開催している。家族に説明し了解を得た上で、転倒防止のためのベッドセンサーを5人に使用しているが、少しずつ使用時間を短縮できないか検討している。スピーチロックに該当するような場面をイラスト化してリビング内に掲示しており、職員の一層の意識啓発に努めている。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	法人内の介護部長が県の認知症ケアの指導者なので必要に応じて研修を受けられる体制である。年に1回虐待防止マニュアルの見直しを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や、成年後見制度を利用されている方や相談はないが、本人や家族からの要望があれば援助できるようにしていきたい。市で開催された成年後見制度事例検討会に参加した。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居申し込みのあった時点で説明を行っており、更に入居時、退去時、リスク説明、少しでも気になる事や変化のあった時はその都度説明している。また利用料金改定があった時は家族来苑時、又は自宅を訪問し説明を行った。相談があった際は、ホームの見学も行ってもらっている。入居申し込みも増えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に投書箱を設置している。入居者へは日常の会話の中で希望を聞いてそれを個別ケアに反映させるようにしている。家族が来苑した際や病院受診の報告時に合わせて日々の様子を伝えている。	利用者の中で4人程が意見や要望を話せる状況であり、食べ物や散歩、お手伝いの希望などが良く出されている。お話し出来ない方には、職員が声掛けしながら希望等を把握するようにしている。家族には定期的に広報を郵送しているが、手渡しでお渡しする家族もあり、その際に意見を伺うようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	2か月に1回の部署会議を開き、意見を発信する機会を設けている。参加できない職員は会議担当職員に申し送ったり、申し送りノートを活用したりしている。普段の業務の中でも意見があれば出せるよう配慮している。	2か月に1回の部署会議で、職員から様々な意見が出されている。例えば、買物の際に利用者も同行し希望の物を買うことが出来るようにするなど、職員の意見で改善した例もある。管理者との個別面談は年度末に行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得に向けて支援を継続しており、資格取得者には正規雇用採用をする機会がある。その都度、看護部長、事務長に相談に乗ってもらっている。週に1回NO残業Dayを設けており、外部研修にも積極的に参加させてもらっている。		

令和 2 年度

事業所名 : グループホーム「綾の里」

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	部署内で年度初めに、年間研修計画を立て、職員が講師になり、研修を行っている。法人内での研修にも参加し、部署内から参加出来ない場合は、併設する小規模、デイから参加した職員から伝達してもらっている。その際、iPadを活用したりしている。希望する外部研修にも勤務調整し参加出来るようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	いわて地域密着型サービス協会の会議や研修会に参加し、他事業所と交流を図り、情報交換を行なっている。また、法人内のグループホームの管理者が参加し3か月に1回集まり、情報交換を行なっている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新規相談時には、管理者・計画作成者により情報を聞きながらご家族様の不安軽減に努めている。また入居前に不安なことや要望を聞くことで、ご家族・入居者様本人の安心に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に訪問するなど、ご家族様からの要望を定期的に伺い情報収集を行っている。遠方に住んでいる家族には、電話などで確認を行っている。随時、ご家族様が困っている事や不安な気持ち、またご要望に対し傾聴している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に実態調査時を行っている。また居宅ケアマネの情報に基づき、本人様・ご家族様が必要としているサービスを理解・把握し職員間で情報共有を行っている。ホームの生活の中で入居者本人様が出来る事を説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除、調理・準備・片付け等、日常生活の中でできることを見つけながら、役割をみつけ生活している。生活歴から趣味や出来る事を生かせるよう心掛けている。また、ホームで野菜などを育てており、利用者と畑の手入れ、収穫を行っている。		

令和 2 年度

事業所名 : グループホーム「綾の里」

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や病院受診結果を報告する際に、ホームでの生活の様子などお伝えしている。また電話でご家族と入居者様でお話を頂く機会を作ったりしている。3回月に一回発行の『綾姫だより』では、写真を添付し様子を伝えている。体調の変化についてもその都度報告している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今年度は、行事の縮小や中止などで家族との接触や外出等が難しくなった為、定期的に行えなかった。ホームで行った行事等は、出来るだけ電話でご家族様に近況報告を行ったりした。また、個人のアルバムを作成しており、家族来所時などに見てもらっている。	空き家となっている実家を気にしている利用者もあり、ミニドライブや通院の機会などに、実家の近くを回るなどして対応している。訪問理容が2ヵ月毎にあり、馴染みとなっているほか、市内の馴染みの美容院に出かける方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の生活の中で馴染みの関係作りができ、入居者様同士で役割を持ち掃除など行っている。また自ら掃除や食器拭きなど積極的に行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了しても、職員が施設へ様子を見に行ったりしていたが、コロナ禍の中、思うように面会等には行けていない。施設職員に電話で近況を聞いたりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の関わりの中の会話から、本人の思いや意向を把握し、申し送りノート、ケース記録を活用し共有している。希望に沿った援助を心掛けている。	利用者の思いや意向は、食事の時間やレクリエーションの最中、入浴時間等に、職員が個々に聞き出す努力を重ねている。聞き出した情報は申し送りノートに記録して、全員で情報共有している。サンマを焼いて食べたい等、食事の希望が多く出されている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族から聞き取り、居宅ケアマネからの情報から、生活環境の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者ごとに日々の観察、心身状態の変化など気づきがあったら、ケース記録や申し送りノートを活用し情報を共有している。		

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケース記録、職員からの聞き取りや申し送りノート、ケース記録からの情報を参考に、一ヶ月に一回モニタリングを実施している。プランに出来る限り反映するようにしている。リハビリスタッフとも連携し、家族からの要望も踏まえ、利用者の心身・生活の変化や生活機能向上に向け、プラン作成に努めている。	3ヵ月毎に介護計画の見直しを行っている。モニタリングは担当職員が行い、その意見と情報をもとに介護計画作成担当者が見直し案を作成している。カンファレンスには法人本部のリハビリスタッフも参加し、個々の身体状況に応じたアドバイスを得て、機能の低下防止に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々の活動内容や体調の変化、入居者の発言や行動を申し送りに記録し、共有している。また、多職種(訪問看護、理学療法士)から助言などを都度ケアプランに反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人、ご家族のニーズにこたえるような対応に心掛けている。医療連携として医療連携記録を活用している。また、報告書には上がらないような「ドキッとした事」というノートを活用している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本人の希望に合わせ、近所を散歩している。3ヶ月に1回の割合で発行しているホーム便りを家族、近隣住民、小中学校へ配布している。コロナウイルス感染予防の為、利用者との買い物は控えている。月1回の移動図書館の利用、2ヶ月に1回床屋さんに来ていただき、散髪している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族が要望するかかりつけ医を受診し、その都度家族へ結果報告し共有している。	多くの利用者が入居前からのかかりつけ医を継続して受診し、市内数カ所のクリニックを利用している。通院には職員が付添うことが多い。コロナ禍の前は家族が付添う方もいたが、それも出来なくなり職員の負担が増えている。日常の健康管理は、法人内の訪問看護ステーションが担っており、安心感がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に一度、訪問看護師が来所し、入居者様とコミュニケーションを取りながら、健康チェックを行っている。個人用申し送りファイル・医療連携記録を活用し、情報共有を図っている。訪問看護師は、24時間対応直通電話があり、時間を問わず夜間・急変時には連絡し、助言を頂いている。		

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	職員・家族様・病院関係者間で連絡を取り合い、状態の把握に努めている。退院後も安心して生活が送れるように、家族様のサポートを行なっている。入院中も、面会が可能であれば面会に行き、病院での様子を実際に確認し、他職員に伝達している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人様・ご家族様の意向を尊重し、終末期・重度化に向けたケアを行なっている。重度化に近づく状況では、法人内のクリニックの協力を得たり、家族様の意向を踏まえながら、老健・特養等への入所支援の説明も行なっている。	重度化した場合の対応については、入居時に家族や本人に説明している。重度化した場合、現状では老健施設への入所や医療機関への入院とし、看取りは行っていないが、看取り経験のある職員が多数在籍し、研修も行っている。将来的に医療的な協力体制が整えば、看取りに取り組んでいきたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訪問看護・小規模多機能ホームと連携し、急変時・事故発生時速やかに対応出来るように、緊急時マニュアル作成や見直し・部署内で緊急通報訓練の研修を行なっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	モバイル通信を活用し、早期に近所に住んでいる法人職員も駆けつけられるよう、災害に備えている。小規模多機能ホーム・デイサービスと隣接しており、夜間の協力体制も整っている。毎年、土砂災害訓練・夜間火災想定訓練も実施している。	年3回、避難訓練を実施している。事業所は、ハザードマップで洪水の心配はないものの、土砂災害危険地域に隣接して立地し、一昨年の大雨時には隣接のデイサービスに避難した経験がある。車椅子利用者が3人おり、夜間避難の際には不安感がある。自家発電設備を有し、食糧等の備蓄もある。	夜間想定訓練は、夕暮れが早くなる時期に実施し、具体的な課題を把握し、併せて、見守り等への近隣住民の協力を募る等の取り組みが期待されます。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者様一人ひとりを尊重し、介助時にはそれぞれのペースに合わせ、ゆったり落ち着いてケアを行なっている。入居者様にも笑顔で元気に穏やかに過ごして頂ける様、優しい温かい声掛け・対応を心掛けている。	特にトイレ誘導の際の声掛けでは、小声で囁くなどの配慮を行い、着替えの際にも周りから見えないように気配りしている。また、理念を活かして、利用者個々のペースに合わせて、ゆったりとした声掛けを行うなど、一人一人の尊厳を大切にしている。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	掃除、調理・準備・片付け等、日常生活の中でできることを見つけながら、役割を見つけ生活している。生活歴から趣味や出来る事を生かせるよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人一人のペースを大事に、起床時間、散歩、役割活動など希望や体調に沿って対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	行きつけの床屋で散髪していた利用者もいたが、今年度は感染状況もあり、全員ホームで行っている。衣服等の追加は利用者から希望を伺いご家族に伝えている。行事の際は化粧したり、浴衣を着たり楽しんでもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は、利用者の好みを取り入れたり、旬の食材を使用し飽きないように工夫している。利用者が畑から収穫した野菜も提供している。食事準備や片づけにも参加して頂いている。利用者の誕生日には本人に食べたい物を聞いて提供したり、利用者と一緒におやつ作りも行っている。	献立は入居者の希望等を聞きながら職員が作成している。事業所前には広い畑があり、3人の利用者が畑作りを行っており、採れたての野菜を活用している。誕生日には希望のメニューを提供したり、おやつ作りも良く楽しんでいる。利用者は、調理や後片付けの手伝いを活発に手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	定期的に栄養士に栄養のバランスをチェックしてもらい、献立に活用している。その日の体調や義歯の調子、咀嚼・嚥下等個々の状態に応じた食形態で提供している。食事量・水分量確保する為、摂取量を記録して確認している。不足傾向にある場合は、声かけや好みの代替品を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、利用者の状況に合わせた口腔ケアを行っている。利用者の状況や変化に合わせて、自力で行える所は行っていただき、出来ない所を援助している。		

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を用い、未排便の確認や個人の排泄パターンの把握に努め、定期的に声掛けしトイレ誘導を行っている。尿意、便意の曖昧な方は、表情や仕草から察し、トイレで排泄できるよう支援している。	排泄チェック表を基本として、表情等を確認しながら声掛けと誘導を行っている。布パンツで自立の方が3人、オムツ使用が1人で他はリハビリパンツを使用している。未排便の方には、下剤使用の前にプルーンジュースを良く飲ませている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日午前中のお茶の時間と夕食後には乳製品を提供しており、未排便続く方には下剤に頼らず、プルーンジュースを朝起床時提供したりして自然な排便を促している。運動は日中のリハビリ体操時に個々の状態に合わせて運動出来る様に支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	小規模多機能と共同使用しておりグループホームは基本的に午後入浴となる。浴室内では周りを気にせず楽しく会話できるよう支援している。季節によっては菖蒲湯、ゆず湯にしたり、保湿剤の入浴剤を使用して変化を持たせている。	小規模多機能ホームと共用の浴室を使用し、週2回入浴を基本としている。一般浴槽であるが、座式リフトの使用者が3人いる。同性介助の希望や入浴を嫌がる方はいない。季節の菖蒲湯やゆず湯を楽しんでおり、職員は1対1となって会話の中から希望などを聞き出している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体調を観察し、疲れや眠気等見られたら居室で横になるよう促している。昼食後は午睡も促している。各居室にエアコンが設置されているので温度・掛物調整もその時々に応じて心地よいように対応している。夜中々寝付けない方はホールでお茶を飲んだり、テレビを観て落ち着けるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診時は、その都度薬の説明書を確認・ファイリングし、受診内容・処方について申し送りノートに記載し、職員が周知できるようにしている。服薬時は職員2名で都度二重チェックを行っている。訪問看護と連携し状態変化の把握に日々努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	農業の仕事をされてきた方には畑の苗の植え付けを手伝って頂いたり、編み物が得意な方は部屋に編み物セットを用意し、自由な時間にできるようにしたり個々の興味事に取り組める様支援している。コロナ禍の中でも季節感を感じてもらう為ドライブに出かけている。天気の良い日には、外で昼食やおやつを食べている。		

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気分転換の散歩は日常的に行っており、ホーム上にある小さな公園にはよく行っており、近所の方々と挨拶を交わすこともある。週末にはドライブに出かけ、夏虫山や尾崎岬、個々の馴染みの土地に寄ったりしている。	外出の支援がコロナ禍の影響を最も受けているとしている。困難な中でも、近所の小公園までの散歩に出かけ、その際に近隣住民との会話を楽しんでいる。また、少しずつバスハイクを再開し、人出の少ない海岸や山間部などへ出かけるようにしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理はホームで行っている。入居者にお金を持たせての買い物は行えていないが、本人が希望する物は家族に確認し、職員が購入するようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	ご本人から、ご家族をなつかしむ言葉があった際や受診報告の際、ご本人と会話をして頂いている。葉書や手紙を準備し、書きたい時に提供し送付する支援を行っており、ご家族からも郵便が届き喜ばれている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節や行事に沿って共用の空間の装飾を行い、どうしてこの様な飾りにしたかと同じ、コミュニケーションのツールとしても活用している。旬の食材を提供し、季節に沿ったおやつを一緒に作り季節感を味わって頂ける様に工夫している。空調は入居者の希望に合わせて調節しており、大きな音での混乱や眩しい光等、都度対応し居心地良く過ごせるよう配慮している。	大きなテーブルがリビングの中央に備えられ、入居者はテーブルの周りに集って寛いでいる。概ね二つの居室に一つの割合でトイレが配置され、混乱なく使用できる環境となっている。エアコンと床暖房で適切な空調管理がなされて、壁面には季節を感じられる折り紙などの作品が飾られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	馴染みの関係が出来ている入居者同士、居室へ誘ったり誘われたりし趣味やお喋りを楽しまれている。職員も介入し過ぎない様に配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、ご家族と相談の上、ご本人が使っていた家具や飾ってほしい馴染みの物を置いており、居心地よく過ごせる様工夫している。昔の写真やペットの写真をいつでも見られる位置や箱に入れ置いており、繰り返し眺めては写真の人物を説明してくれる姿も見受けられる。	エアコンと床暖房で温度管理され、ベッドと洗面台が備え付けられている。利用者は筆筒や衣装ケース、テレビや家族写真などを持ち込み、それぞれの折り紙や編み物の作品等を室内に飾り、居心地良い部屋となっている。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の部屋が分かる様に、入口に名前とご本人の写真を掲示している。トイレマークは、廊下のどこからでも見える角度で設置しており、入口にも掲示物を貼っている。		